

# 北大時報

February 2011

No.683

平成23年

2

## 鈴木 章 名誉教授に 内閣総理大臣から感謝状授与

## 北海道大学一般入試の志願状況

### お知らせ

- 過半数代表候補者の決定
- 国立女性教育会館所蔵図書の貸出サービス実施中



「森のたんけん隊2011冬」 (2011.1.13～14, 関連記事26頁に掲載)

# 目 次

## 全学ニュース

- 鈴木 章 名誉教授に内閣総理大臣から感謝状授与 …… 1
- 北海道大学一般入試の志願状況 …… 2
- AO入試合格者の発表 …… 3
- 北大フロンティア基金 …… 4
- 企業研究セミナーを開催 …… 6
- 「若手人材育成シンポジウム “SynFOSTER2011”」の開催 …… 7
- 北海道大学総長奨励金留学生報告会を実施 …… 8

## 部局ニュース

- 2010年ノーベル化学賞受賞の鈴木章氏, 根岸英一氏に特別招へい教授の称号を授与 …… 9
- 2010年ノーベル化学賞受賞 根岸英一触媒化学研究センター特別招へい教授来道 …… 10
- HUSCAP, 世界ランキング第5位 …… 15
- 電子科学研究所が台湾国立交通大学理学院と部局間学術交流協定を締結 …… 16
- 国際会計基準審議会 (IASB) 理事の講演会を開催 …… 17
- 獣医学部で「北海道大学・帯広畜産大学獣医学共同教育課程実施に向けてのFDSD交流会」を開催 …… 18
- グローバルCOEプログラム「知の創出を支える次世代IT基盤拠点」, 第4回国際シンポジウム「GCOE-NGIT2011 (知の創出を支える次世代IT)」を開催 …… 19
- 「エコプロダクツ2010」に出展 …… 20
- 東アジアメディア研究センターが, 東京で国際シンポジウム「中国の影響力拡大と日本-政治体制改革とメディアの越境-」を開催 …… 21
- 工学系教育研究センター「海外インターンシップ体験報告会」を開催 …… 22
- 真冬の森の宝を見つけたよ! -雨龍研究林で「森のたんけん隊2011冬」を開催 …… 26
- 農学院において「留学生新年会」を開催 …… 28
- 教育GPワークショップ「博物館で個性が活かせる授業を創ろう!」第4回 (題材:化石) 開催 …… 29

- 第15回北海道大学教育GPセミナー「教育の改革と将来像」開催 …… 30
- ポーリン・レーン書簡を大学文書館で受贈 …… 31
- 大学文書館第1回企画展示「台湾に渡った北大卒業生たち」を開催 …… 32

## お知らせ

- 過半数代表候補者の決定 …… 33
- 国立女性教育会館所蔵図書の貸出サービス実施中 …… 34

## 研修

- 平成22年度北海道地区国立大学法人等事務情報化講習会 (ACCESS中級) …… 35
- 平成22年度北海道地区国立大学法人等事務情報化講習会 (ACCESS初級) …… 35

## 表敬訪問

- …… 36

## 同窓会との交流

- 恵迪寮同窓会「新年寮唱歌始めの会」 …… 38

## 諸会議の開催状況

- …… 39

## 学内規程

- …… 40

## 人事

- …… 41

## 訃報

- 名誉教授 佐藤 修 氏 …… 42
- 教授 小川 泰寛 氏 …… 43
- 教授 近藤 哲 氏 …… 44

## 全学ニュース

# 鈴木 章 名誉教授に内閣総理大臣から感謝状授与

1月19日(水), 鈴木章名誉教授が, 根岸英一パデュエー大学特別待遇教授と共に首相官邸に招かれ, 菅直人内閣総理大臣から感謝状と記念の銀製フォトフレームを授与されました。

菅総理大臣は, 「(お二人のノーベル化学賞の受賞は)国民の誇りで, 学術, 文化, 科学技術の発展に多大の貢献をされるものです」と称え, 平成23年度の科学技術関連予算について, 「若い人が(お二人の)後を追って研究できるよう, 思いきって増やしました」と説明されました。

授与式後の懇談の中で, 鈴木名誉教授と根岸特別待遇教授がノーベル化学賞のメダルを披露

し, 菅総理大臣はメダルを手にとって「本物のゴールドですか?」と尋ね, 眼鏡をかけて細部まで観察されていました。

また, 鈴木名誉教授は, 平成23年度予算案の中で科学技術振興費の増額を決断した菅総理大臣に, 「研究者の一人としてお礼申し上げたい」と述べ, 謝意を示されました。

終了後, ロビーで待ち構えていた報道陣からの取材に対し, 鈴木名誉教授は, 「若い人たちの努力をサポートしたいという気持ちは, 菅総理大臣も私も同じではないかと思う」と述べられました。



菅総理大臣から感謝状を授与される鈴木名誉教授



記念撮影(左から 菅野官房副長官, 枝野官房長官, 鈴木名誉教授, 菅総理大臣, 根岸パデュエー大学特別待遇教授, 玄葉国務大臣, 清水文部科学事務次官)



ノーベル・メダルを手にした菅総理大臣に重さを説明する鈴木名誉教授



ノーベル・ディプロマに描かれた絵について説明する鈴木名誉教授



佐伯総長に菅総理大臣からの感謝状を披露(2月8日(火))

(総務部広報課)



# 北海道大学一般入試の志願状況

平成23年度の本学一般入試の志願者数は、前期日程5,736名、後期日程4,254名、合計9,990名となり、昨年度と比較すると若干増加し、倍率は4.1倍となりました。

入学試験日は、前期日程が2月25日（金）

26日（土）、後期日程が3月12日（土）となっています。

各学部・学科等の志願者数は、次のとおりです。

## 平成23年度北海道大学入学志願者数

### 一般入試

日程	学部・学科等	募集人員	志願者数	倍率	第一段階選抜 予告倍率	前年度 志願者数	前年度倍率		
前期日程	総合入試	文系	100	463	4.6	4.0	/		
		理系	数学重点選抜群	130	319	2.5			4.0
			物理重点選抜群	235	752	3.2			4.0
			化学重点選抜群	235	698	3.0			4.0
			生物重点選抜群	177	459	2.6			4.0
			総合科学選抜群	250	602	2.4			4.0
			計	1,027	2,830	2.8			
	学部別入試	文学部	118	342	2.9	4.0	456	3.1	
		教育学部	20	64	3.2	4.0	124	2.9	
		法学部	140	338	2.4	4.0	404	2.5	
		経済学部	140	449	3.2	4.0	549	3.4	
医学部		医学系	97	281	2.9	3.5	332	3.6	
		保健学系	看護学専攻	60	149	2.5	5.0	139	2.5
			放射線技術科学専攻	28	77	2.8	5.0	93	3.1
			検査技術科学専攻	28	96	3.4	5.0	83	2.8
			理学療法科学専攻	13	38	2.9	5.0	45	3.2
			作業療法科学専攻	13	29	2.2	5.0	41	2.9
小計	142	389	2.7		401	2.8			
計	239	670	2.8		733	3.1			
歯学部	30	107	3.6	6.0	143	4.1			
獣医学部	20	103	5.2	6.0	120	6.0			
水産学部	105	370	3.5	4.0	505	3.1			
合計		1,939	5,736	3.0		5,428	2.8		
後期日程	文学部	37	318	8.6	6.0	335	9.1		
	教育学部	10	78	7.8	10.0	109	21.8		
	法学部	40	391	9.8	6.0	398	10.0		
	経済学部	20	235	11.8	10.0	196	9.8		
	理学部	数学科	13	89	6.8	6.0	573	9.4	
		物理学科	5	100	20.0	6.0			
		化学科	15	130	8.7	6.0			
		生物科学科 生物学専修分野	5	78	15.6	6.0			
		生物科学科 高分子機能学専修分野	5	51	10.2	6.0			
		地球惑星科学科	5	61	12.2	6.0			
		計	48	509	10.6				
	医学部	保健学系	7	62	8.9	6.0	33	4.7	
		放射線技術科学専攻	7	95	13.6	6.0	60	8.6	
		検査技術科学専攻	4	49	12.3	6.0	29	7.3	
	小計	18	206	11.4		122	6.8		
	歯学部	8	115	14.4	6.0	85	5.7		
	薬学部	24	252	10.5	6.0	178	8.9		
	工学部	応用理工系	34	330	9.7		276	9.2	
		情報エレクトロニクス系	38	286	7.5		249	8.3	
		機械知能工学系	30	240	8.0		201	10.1	
環境社会工学系		53	396	7.5		364	10.1		
計		155	1,252	8.1		1,090	9.4		
農学部	53	418	7.9	6.0	349	7.8			
獣医学部	15	114	7.6	6.0	156	7.8			
水産学部	50	366	7.3	6.0	293	8.4			
合計		478	4,254	8.9		4,235	9.1		
総計		2,417	9,990	4.1		9,663	4.0		

注：「前年度志願者数」「前年度倍率」の「合計」「総計」は、今年度募集しない学部・学科等を含む。

(学務部入試課)

## AO入試合格者の発表

平成23年度AO入試のうち、大学入試センター試験を課す医学部及び工学部の合格者発表が2月8日(火)に行われ、11名が合格しました。

昨年12月7日(火)に合格者発表が行われた理学部、歯学部及び水産学部と合わせ、合格者数は52名となりました。

### 平成23年度AO入試合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	志願者数	倍率	第1次選考合格者	合格者
理学部	物理学科	5	6 (2)	1.2	5 (2)	0
	化学科	8	20 (7)	2.5	17 (6)	8 (5)
	生物科学科 (生物学専修分野)	5	15 (7)	3.0	11 (7)	4 (3)
	地球惑星科学科	5	7 (3)	1.4	7 (3)	3 (2)
医学部	医学系	5	21 (14)	4.2	8 (7)	2 (1)
	保健看護学専攻	7	20 (15)	2.9	20 (15)	7 (6)
	学系 作業療法学専攻	4	1 (1)	0.3	1 (1)	1 (1)
歯学部		5	12 (2)	2.4	10 (2)	5 (2)
工学部応用理工系 (応用マテリアル工学コース)		4	3 (2)	0.8	2 (2)	1 (1)
水産学部		20	48 (12)	2.4	34 (10)	21 (6)
計		68	153 (65)	2.3	115 (55)	52 (27)

※ ( ) 内は、道内高校出身者で内数

(学務部入試課)

## 北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、法人化後の厳しい財政状況の下、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自律性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っていくこととしています。

期限を付さない、息の長い募金活動をするとしています。平成18年から平成23年までの5年間で15億円から25億円の募金額を目指しています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

### 【北大フロンティア基金情報】

基金累計額 (1月31日現在)

10,432件 1,872,823,290円

教職員の寄附率 24.8% (954件/3,842人)

### < 1月のご寄附状況 >

法人等7社、個人95名の方々から14,606,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲載、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

なお、基金累計額には、北海道大学国際交流事業基金より移し替えた2億円を含んでおります。

### 寄附者ご芳名

#### (法人等)

アイエヌオー株式会社、株式会社ウチダシステムソリューション、株式会社内田洋行、戸田建設株式会社札幌支店、柏楊印刷株式会社、北大第三内科同門会

#### (個人)

相田 学, 浅香 正博, 石井 大二, 上田 敦, 大沼 孝二, 大畑 昇, 小内 透,  
織田 裕幸, 角張 裕信, 久米 尚雄, 合田 昌弘, 小林 生吉, 齋藤 幸雄, 佐々木達文,  
佐々木豊子, 清水 晋, 杉浦 秀一, 鈴木 恵二, 鈴木 精華, 瀬名波栄潤, 高木 亮司,  
高橋 光彦, 高橋 庸夫, 竹内伸太郎, 田中 譲, 棚川伊知郎, 土家 琢磨, 寺澤 睦,  
所 伸一, 豊田 威信, 野坂 政司, 早川 邦雄, 早坂 孝一, 藤井 廣厚, 古館 清吾,  
松平 英明, 宮永 喜一, 山城 明伸, 油井 俊, 吉田 広志, 鷺見 宗

## 銘板の掲示 (20万円以上のご寄附)

(法人等)

アイエヌオー株式会社

(個人)

浅香 正博, 石井 大二, 齋藤 幸雄, 佐々木達文, 佐々木豊子

## 感謝状の贈呈



石井清一様 (平成23年2月9日)

## ご寄附のお申し込み方法

## ① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。

北大ホームページ > 教職員向け > 学内限定情報・システム > 北大フロンティア基金のご案内(申込書)

<http://www.hokudai.ac.jp/jimuk/gakunai/fund.pdf>

## ② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

## ③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ —— 基金事務室 (事務局1階・学内電話 2012 / 2017)

(基金事務室)

## 企業研究セミナーを開催

キャリアセンターでは、北海道大学連合同窓会と協力し、昨年12月6日（月）～22（水）及び1月6日（木）～18日（火）のうち22日間にわたり、「平成22年度北海道大学企業研究セミナー」をクラーク会館において開催しました。

このセミナーは、これから就職活動をはじめ学生が地理的ハンディキャップを少なくした上で、学生が主体的に企業・業界研究を行い、「就職活動へ向けての礎をつくる」ことができるよう実施している就職活動支援イベントです。

本年度は427社（昨年度：415社）の企業が参加し、延べ23,529名（昨年度：23,180名）の学生が、企業の人事・採用担当者からの企業・業界に係る説明に熱心に耳を傾け、積極的に質問等を行っていました。

また、留学生の採用を予定している企業による「留学生相談コーナー」には、74社が参加

し、96名の学生が利用しました。

さらに、セミナー終了後には、企業の人事・採用担当者と学生との交流の場として「情報交換会」を設けました。1月17日（月）には佐伯浩総長，協田稔理事・副学長も参加し、人事・採用担当者と学生の輪に加わって打ち解けた雰囲気の中で懇談しました。

このほか、セミナー期間中には、「グループディスカッション講座」、「公開模擬面接会」及び「予約制模擬面接会」を特別企画として実施しました。特に「公開模擬面接会」では、企業の人事・採用担当による面接・講評を受け、担当者からは「就職活動についてしっかり理解をした上で、学生時代にやってきたことを十分に説明できている。」との好評価を得ていました。

本セミナーは、各企業及び諸団体等のご協力を得て開催されたものです。関係の皆様には感謝申し上げます。



説明会で企業の説明を熱心に聞く学生たち



情報交換会で企業の人事・採用担当者と懇談する学生



特別企画「グループディスカッション講座」での討議風景



特別企画「公開模擬面接会」で面接を受ける学生と聴講学生

（学務部キャリアセンター）



## 「若手人材育成シンポジウム “SynFOSTER 2011”」 の開催

1月20日(木)に学术交流会館において「若手人材育成シンポジウム “SynFOSTER2011”」を開催しました。

本シンポジウムは、本学が展開する多様な若手研究者人材育成プログラムが互いの“音”を聴き合い、響き合い、北大らしい力強いシンフォニーを発信するとの意味を込めたもので、今年度で3回目の開催となりました。

シンポジウムでは、文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課人材政策企画官 猪股志野氏、新日本製鐵株式会社技術開発本部人事グループリーダー部長 村瀬賢芳氏からの基調

講演のほか、「女性の参画促進で科学研究・教育はどう変わるか」と題したパネルディスカッションや本学の魅力ある大学教育の取組紹介などが行われ、全体で18機関36名の学外参加者を含めた133名の参加がありました。

第3部のポスターセッションでは、本学で実施している人材育成に関する約30事業の出展者からのショートトーク発表を始め、参加者間で活発な意見交換や情報共有が行われるなど、大盛況の中、終了することができ、本学独自の一貫した人材育成システムの構築に大きく寄与するものとなりました。



講演する文部科学省 猪股企画官



講演する新日本製鐵株式会社 村瀬部長



パネルディスカッションの様子



ポスターセッションの様子

(学術部研究協力課)

## 北海道大学総長奨励金留学生報告会を実施

北海道大学総長奨励金留学生報告会が1月28日（金）に留学生センター会議室において開催されました。

北海道大学総長奨励金は、国際本部に係る「中期目標達成強化経費」による事業の一つで、本学大学院に優秀な私費外国人留学生を受け入れるため、学業成績が極めて優秀で、かつ、本学の教育研究等及び日本文化等に大きな関心を持つ者に対し奨学金を給付する制度です。平成18年度から受入れを開始しており、現在は13名の留学生が在籍しています。

この報告会は、国際本部が奨学金給付後のフォローアップとして実施するもので、留学生とその指導教員等が出席しました。今回発表したのは昨年10月に入学した研究生5名を除く8名です。

最初に留学生から本学での研究の進捗状況や北海道での生活についての報告があった後、指

導教員等からの補足説明と、出席者との活発な質疑応答が行われました。各々の報告時間は短かったものの、留学生たちがそれぞれの研究分野で先端的・独創的な研究を行っており、成果も十分に上がっていることを伺い知ることができました。非常に難易度が高いテーマに果敢にチャレンジしている学生や、多くの論文を執筆している学生、また、学会や学業外の活動等に積極的に参加している学生もおり、指導教員からも頼もしく思っているとの感想が聞かれました。流暢な日本語で発表する学生も多く、指導教員の先生や研究室に親しみ、充実した学生生活を送っている様子が伝わってきました。

最後に、新田孝彦国際本部副本部長より、「この報告会を見る限り、奨学金は非常に有効に使われていると言えると思う。今後もそれぞれの研究分野でのますますの活躍を期待するとともに、北海道での学生生活も存分に楽しんでいただきたい」との言葉がありました。



報告する留学生



質疑応答風景

(国際本部国際支援課)

## 部局ニュース

# 2010年ノーベル化学賞受賞の鈴木章氏，根岸英一氏に特別招へい教授の称号を授与

### 称号授与の決定

触媒化学研究センターは、平成22年10月20日開催の協議委員会において、2010年ノーベル化学賞の受賞が決定した北海道大学名誉教授 鈴木章氏及び米国パデュー大学特別待遇教授 根岸英一氏の両名に触媒化学研究センター特別招へい教授の称号を授与することを決定いたしました。

これは、触媒化学研究センターの学術研究の進展並びに共同利用・共同研究拠点の機能向上に資するため、ノーベル賞、文化勲章等を受賞した顕著な業績を有する本学の教授経験を有する者や、顕著な業績を有し、センターの研究活動及び大学院の教育活動の進展に特に寄与した者に授与し、本センターに活動の拠点を確保、その活動を支援しようとするものです。

両氏は、触媒化学研究の拠点である本センターが平成17年(2005)から毎年国外において実施している情報発信型国際シンポジウム「CROSS-COUPLING & ORGANOMETALLICS」において毎回招待講演を行っていただく等、長年にわたり、本センターの研究活動に寄与していただきました。



固く握手する両氏

### 称号授与式

12月23日(木) 激しく雪の舞うJRタワーホテル日航札幌スカイバンケットホール「たいよう」において、特別招へい教授称号授与式を挙行しました。

根岸英一氏がノーベル化学賞受賞後初めて来札されるのを期に、鈴木章氏、根岸英一両氏に福岡 淳触媒化学研究センター長から特別招へい教授称号記を授与しました。



福岡センター長と鈴木氏



福岡センター長と根岸氏

当日は報道関係10数社の取材もあり、華々しい授与式が挙行されました。

授与式後、センター長主催の昼食会が鈴木氏ご夫妻、根岸氏ご夫妻及び本センター関係者で厳かに行われ、両名の今後の活動等について懇談が行われました。



集合写真

(触媒化学研究センター)

## 2010年ノーベル化学賞受賞 根岸英一触媒化学 研究センター特別招へい教授来道

### ●12月23日（木）記念講演会・祝賀会

触媒化学研究センターは、根岸英一触媒化学研究センター特別招へい教授（米国パデュー大学特別待遇教授）が2010年ノーベル化学賞を受賞したことを記念し、講演会及び祝賀会を開催しました。

記念講演会は市内の道新ホールにおいて、触媒化学研究センターの職員・学生及びセンターに縁のある学内外の研究者等300名余りが集まり行われました。講演に先立ち、吉田邦夫財団法人総合工学振興会理事長及び檜山爲次郎中央大学研究開発機構教授から来賓の挨拶をいただきました。



挨拶する吉田理事長



挨拶する檜山教授

講演のタイトルは、「ノーベル賞を受賞して -Magical Power of d-Block Transition Metals-」。講演要旨は次のとおりです。

「2000-2010の10年間で触媒を対象とする研究で9人（3人×3回）の研究者がノーベル化学賞を受賞している。これは、ノーベル財団がこの分野を重要と認めている証拠である。

私はC-C結合のクロスカップリング反応において中心的触媒としてTransition Metal（遷移金属）パラジウム（Pd）を使う。ヘック先生は水素（H）を使い、鈴木先生はホウ素（B）を使う。クロスカップリングによる有機合成は、道半ばを過ぎたところで、まだまだこれから発展すると考えている。

我々有機合成化学者は、何でも有機合成で作りたい、さらに目標物を高効率に高収率で作りたいと考える。化学合成において不要物を産まない触媒は有効である。私の使うパラジウムも数百万回などすぐ回る。効率の高い触媒である。そこで、触媒を使うと、Efficiently（効率的）、Selectively（選択的）、Economically（経済的）、Safely（安全）である。すなわち、YES（ES）→『Green Chemistry』である。

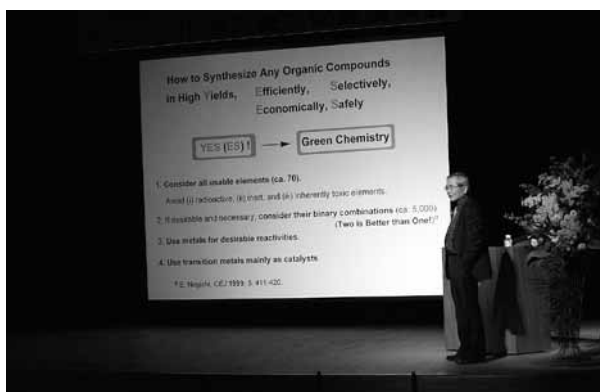
元素周期表は10~12ある有機元素を除くとほとんどが金属であり、その半分がTransition Metals（遷移金属）である。私は、有機合成反応において全ての元素を考慮したらどうかと考える。有害なものを除くと70位であり、そこから得られる2元の組合せは約5,000組もある。『Two is Better than One!』である。私は、大学院生の時にこの組合せを全てレゴゲームのようにカップリングできないか考え始めた。



講演する根岸特別招へい教授



今日強調したいのは、d-Block Transition Metalsが我々人類にとって有用であるということである。Transition Metals（遷移金属：チタン（Ti）、銅（Cu）、ニッケル（Ni）、クロム（Cr）、鉄（Fe）等）は近年までは主に材料として使われていたが、材料として使うのは化学的に古い使い方であり、触媒として使うのが有用である。今世紀の化学としても認められている。クロスカップリング反応も触媒がなければ生じないのである。」



講演する根岸特別招へい教授

引き続き、会場をJRタワーホテル日航札幌に移し、講演会同様触媒化学研究センターの職員・学生及びセンターに縁のある学内外の研究者等200名余りが集まり記念祝賀会が盛大に行われました。

根岸英一先生ご夫妻入場後、福岡淳触媒化学研究センター長の挨拶、佐伯浩北海道大学総長、川上伸昭科学技術振興機構理事、谷田部俊明帝人株式会社取締役常務執行役員CTOから祝辞があり、根岸英一先生の受賞挨拶の後、岡田尚武北海道大学理事・副学長の乾杯発声で祝宴が始まりました。

宴会が始まると根岸先生の前には列ができ、先生は料理に手を付けるのが難しいほどの人気でした。お話をされる方、購入した根岸先生の本にサインを求める方、一緒に写真に収まる方等、ノーベル化学賞受賞者を前に皆緊張気味でした。

宴会中ほどには、根岸先生の来日に支援をいただいた日本航空から藤田克己北海道地区支配人・札幌支店長に、翌日の市民講演会を共催する北海道新聞社から遠藤雅之取締役編集局長にスピーチをいただきました。



挨拶する福岡センター長



祝辞を述べる佐伯総長



祝辞を述べる川上理事

今回の祝賀会には触媒化学研究センターのOBにも声を掛け、多数のOB・OGが参加されました。



スピーチする藤田克己支配人



スピーチする遠藤雅之局長



根岸先生と歓談する金岡祐一元センター長

祝賀会は、大盛況の中、大澤雅俊触媒化学研究センター教授の締めの乾杯により幕を閉じました。

●12月24日（金）札幌西高校で講演会／道新ホールで市民講演会

翌24日（金）は、北海道庁に高橋はるみ知事を表敬訪問した後、道立札幌西高等学校で講演会を行いました。同校には、国際生物学オリンピック日本代表候補者が在学している関係で講

演を行うことになりました。

札幌西高校には、在校生、父兄及び北海道教育委員会の関係者約1,000名が集まり、根岸先生の講演を熱心に聞いていました。

高橋保触媒化学研究センター教授の講演者紹介の後、「夢と幸せを求めて」と題して講演が行われました。根岸先生は時折ノーベル化学賞のメダル（本物）を見せながら、どんなことでも好きな事を見つけて努力すること、目標を達成するためには階段を上るように努力する事が大切であることを、自分のノーベル賞受賞までの過程を例にあげながら話をされました。



講演する根岸特別招へい教授



札幌西高校生と対談する根岸先生

講演終了後、在校生との対談が行われ、生徒から「研究者になりたいが、自分の専門とすること以外に高めておく事はあるか」「研究をくじけそうになって辞めようと思った事はあるか」等の質問が出され、根岸先生から「研究のために高校時代に習う事全てが基礎になるので高校時代が重要であること、研究は好きでやっているのにくじけそうになった事はない」等丁寧に回答がありました。

講演会及び対談は、到着が遅れたため若干短い時間で行われましたが、大盛況の中終了し、拍手で見送られ、同校を出発しました。

引き続き、今度は道新ホールに会場を移し、ノーベル化学賞受賞後日本で初めての市民向け講演会を北海道新聞社と共催で行いました。

同講演会は、北海道新聞に掲載された申込み定員550名の案内広告に対し、わずか数日で1,000名を越える市民から申込みがあり、当日はプラチナチケットを手に入れた札幌市民が会場に所狭しと集まりました。

当日の司会はFM北海道の中田美知子さん、講演者紹介は触媒化学研究センターの高橋教授が行い、タイトル「夢と幸せを求めて」で講演が行われました。

講演は、人が幸せを掴むためには条件が4つある事を、根岸先生の人生経験を交えながらお話しされました。(講演要旨は平成23年1月10日付け北海道新聞に詳しく掲載)

講演終了後、司会の中田美知子氏との対談が予め参加者から集められた質問を基に行われ、根岸先生からエピソードを交え回答がなされました。

対談終了後、北海道新聞社の単独取材、その後、共同記者会見、宿泊先のホテルに戻ってNHKの取材を受ける等、忙しい1日でした。



中田氏と対談する根岸先生

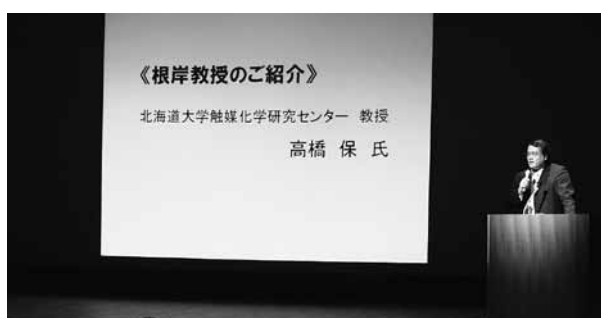
#### ●12月25日(土)立命館慶祥高校で講演会

来道最終日の25日(土)は、立命館慶祥高等学校を訪問して講演を行いました。

同校では、生徒が新聞スクラップ等で作成した壁新聞が根岸先生を出迎え、会場となった体育館には1,800名を越える生徒、父兄が参集していました。

根岸先生は大きな拍手に迎えられ入場し、同校でもノーベル化学賞の本物のメダルを時折見せながら、ノーベル化学賞受賞のためのステップを例にあげながら、順追って努力する事の大切さを話されました。

講演後、同校化学部との対談も企画され、根岸先生、生徒とも楽しそうに化学談義に花を咲かせていました。



講演者を紹介する高橋教授



メダルを見せながら講演する根岸先生



講演する根岸特別招へい教授



化学部の生徒と対談する根岸先生





根岸先生の講演を聞く生徒等



先生を迎えた壁新聞

この後、根岸先生は新千歳空港に向い、北海道での短い3日間を終え離道されました。

根岸先生は、ノーベル化学賞受賞決定後、かなり過密なスケジュールでお疲れにも関わらず、いやな顔一つせず、講演にも取材にも応えておられました。今回対応したスタッフとして感謝の気持ちで一杯です。

根岸英一先生ありがとうございました。

先生の益々の活躍と健康を祈念します。

(触媒化学研究センター)



## HUSCAP, 世界ランキング第5位

北海道大学学術成果コレクション(HUSCAP)は、本学研究者による学術論文など約3万件以上をインターネット上で無料公開しているもので、機関リポジトリと呼ばれるシステムです。

スペイン高等科学研究院が作成する世界リポジトリランキング(2011年1月版)の機関リポジトリのランキング(Top Institutional Repositories)において、本学のリポジトリHUSCAP(Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers)が世界の1,120機関の中で第5位と評価されました。

[http://repositories.webometrics.info/toprep\\_inst.asp](http://repositories.webometrics.info/toprep_inst.asp)

このランキングは、収録件数の多さ、他のサイト等からのリンクの多さ、本文PDFの多さ、Google Scholarでの検索されやすさ等の指標を同研究院が独自に測定し、毎年1月と7月にランク付けしているものです。

附属図書館では今後とも、HUSCAPによる成果発信に努めてまいります。

WORLD RANK	REPOSITORY	COUNTRY	POSITION			
			SIZE	VISIBILITY	RICH FILES	SCHOLAR
1	Smithsonian/NASA Astrophysics Data System	USA	2	1	792	1
2	CERN Document Server	Switzerland	1	14	1	3
3	Kyoto University Research Information Repository	Japan	30	3	3	14
4	National Taiwan University Repository	Taiwan	56	4	32	2
5	Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers	Japan	15	7	61	16
6	HAL Sciences de l'Homme et de la Société	France	122	6	76	27
7	Digital Library and Archives Virginia Tech University	USA	71	15	11	29
8	University of Michigan Deep Blue	USA	19	33	8	21
9	Universitat Autònoma de Barcelona Dipòsit Digital de Documents	Spain	3	61	2	68
10	University of Twente Repository	Netherlands	45	10	35	62

世界リポジトリランキング

(附属図書館)

## 電子科学研究所が台湾国立交通大学理学院と 部局間学術交流協定を締結

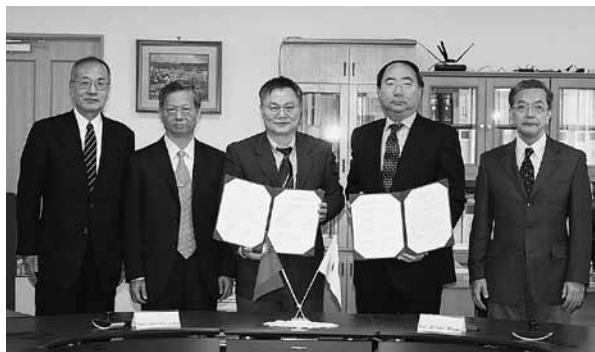
電子科学研究所では1月24日（月）に、台湾国立交通大学理学院との間で部局間学術交流協定を締結し、莊振益（J.-Y. Juang）理学院長と三澤弘明研究所長が覚書に調印しました。本堂武夫理事・副学長への表敬訪問の後に本研究所の所長室で行われた調印式には、上記2名の両部局代表の他に、交通大学からは李遠鵬教授（Y.-P. Lee, 学際科学センター長）、本研究所からは副所長の中村貴義教授及び太田信廣教授が出席しました。

交通大学は台湾のシリコンバレーと呼ばれ、IT関連の工場や企業が集中する新竹市（台北の南西50km）にあり、国立台湾大学、国立清華大学とともに同国で有数の大学として知られています。日本国内では東京大学、東京工業大学、東北大学等が既に大学間学術協定を締結しています。

今回協定を締結した理学院は交通大学にある8つの学院のうちの1つになりますが、応用化

学科、電子物理学科、物理研究所、分子科学研究所等の8つの学科及び研究所が含まれており、分子科学や光化学の研究分野で著名な日本人研究者も現在、講座教授として複数所属されています。近年、理学院の様々な学科や研究所のスタッフから構成される学際科学センターが設置され、センター長の李教授を中心に、光科学、分子科学、ナノ物質科学、材料科学、生命科学が関係した非常に学際的な研究が進められています。これらは本研究所の特徴とも非常に共通するものであり、このセンターに属する研究者の方々とこれまで主に共同研究を進めてきました。

今回の学術交流協定締結を機に、このセンターを含めた理学院全体と学生、研究者の交換等を含めた学術交流をさらに促進させ、物理学、化学、生命科学が関係する複合および学際領域の研究のさらなる発展及び新たな学術交流ネットワークの形成を進めることとなります。



調印式の様子

（電子科学研究所）

## 国際会計基準審議会 (IASB) 理事の講演会を開催

経済学研究科会計情報専攻(会計専門職大学院)では、1月28日(金)に、日本公認会計士協会北海道会ならびに札幌証券取引所との共催で(後援:(社)日本内部監査協会)、国際会計基準審議会(IASB)の理事である山田辰己氏を講師に招き講演会を開催しました。

山田氏は、「IFRSの設定の現状について－米国会計基準とのコンバージェンスの進展にも触れて－」という演題で講演されました。IFRSは国際的な会計基準の統一を図るためにIASBによって設定された基準で、2010年3月期決算からわが国でも任意適用が認められています。さらに、金融庁の方針として、2015年にもすべての上場会社に適用が義務づけられる可能性があり、経済界では高い関心が寄せられているテーマです。また、会計監査を行う公認会計士や会計制度の研究者もその動向に注意を払っています。

こうした状況を反映して、道外からの参加者

を含め、200名程の公認会計士、企業の経理・監査担当者、さらには会計研究者や会計学を学ぶ学生が参加し、山田氏によるIFRSの動向に関する説明に熱心に耳を傾けていました。

山田氏をはじめ、IASB設立当初からの主要メンバーの任期満了を今年6月に控え、残された重要な基準の設定作業が急ピッチで進められています。こうした重要基準の設定見通しについて、具体的で詳細な解説が行われたことで、会計実務従事者や今後会計専門職を目指す学生にとって極めて有意義なセミナーとなりました。

会計専門職大学院では、日本公認会計士協会北海道会などと協力して、今後もIFRSの動向や詳しい実務対応などに関する講演会、セミナーなどを開催することで、北海道地域の企業におけるIFRSへの対応に役立つ情報の提供を行っていきたいと考えています。



国際会計基準審議会 (IASB)  
理事 山田 辰己 氏



多くの参加者で埋まった会場

(経済学研究科・経済学部)

## 獣医学部で「北海道大学・帯広畜産大学獣医学共同教育課程実施に向けてのFDSD交流会」を開催

獣医学部では、1月21日（金）、22日（土）にかけて、「北海道大学・帯広畜産大学獣医学共同教育課程実施に向けてのFDSD交流会」を音更町十勝川温泉笹井ホテルトレディングホールにて開催しました。

本研修会は、共同教育課程実施に係る教職員総勢71名が一同に会し、1) 共同教育課程実施に向けての共通認識、2) 共同教育課程実施に向けての進捗状況報告と情報交換、および3) 共同教育課程準備会の発足を目的に行いました。

最初に登壇した帯広畜産大学の長澤秀行学長から、FDSD交流会にあたって歓迎の挨拶があり、本課程実施に向けての決意を表しました。次に、カナダオンタリオ州立ゲルフ大学獣医学部の山城茂人教授をお招きし、「カナダの獣医学教育について学ぶ」と題し、ご講演をいただきました。その後、両大学獣医学部（課程）の組織運営の違いについて、本学の昆泰寛副研究科長と帯広畜産大学の北村延夫ユニット長が説明を行いました。

次に、「共同教育課程の趣旨－共通認識の必要性和両大学間話し合いの全過程－」について本学の伊藤茂男研究科長が話し、さらに「北大帯

畜大獣医学共同教育課程のアウトライン－実行教育課程表を中心に－」について本学の木村和弘獣医学部教務委員長・帯広畜産大学の倉園久生教授が講演しました。ここでは、両大学が同じ到達目標を掲げ、共通認識をもって共同教育課程を進めて行くことの問題点・改善点について多くの意見が交わられました。

2日目には、基礎系・病態系・応用系・臨床系のグループに分かれ、科目名、科目責任者・分担者、単位数、開講時期およびシラバスについて検討がなされました。その後、検討結果を各自から報告し、合意した点および問題点の洗い出しを行いました。この間、事務職員も一般教養教育科目の位置付け、それぞれの大学が担う事柄、さらには運営組織の設置について積極的に議論がなされました。最後に、本教育課程実施に向けて準備会が発足され、今後中心的に活動して行くこととなりました。

なお、本FDSDは平成22年度総長室事業推進経費によるプロジェクト研究「獣医学共同教育課程実施に向けての共通FDシステムの開発」によって行われたものであることを付記します。



初日の講演の様子



参加者で記念撮影



講演する木村獣医学部教務委員長と  
帯広畜産大学・倉園教授



2日目のグループ討論

(獣医学研究科・獣医学部)



## グローバルCOEプログラム「知の創出を支える次世代IT基盤拠点」, 第4回国際シンポジウム「GCOE-NGIT2011 (知の創出を支える次世代IT)」 を開催

情報科学研究科では1月18日(火)、19日(水)の両日、学术交流会館において、グローバルCOEプログラム「知の創出を支える次世代IT基盤拠点」(拠点リーダー:有村博紀)主催による第4回国際シンポジウム「GCOE-NGIT2011 (知の創出を支える次世代IT)」を開催しました。

シンポジウムでは、Stuart Kauffman博士(カナダ・カルガリー大学、米国・サンタフェ研究所)をはじめとする学外の招待講演者による4件の基調講演と特別セッションのほか、本プログラムのもとで特に優秀な成果を上げた学生による学生選抜セッションと、拠点メンバーによる異分野共同研究プロジェクトについてのセッションが行われました。

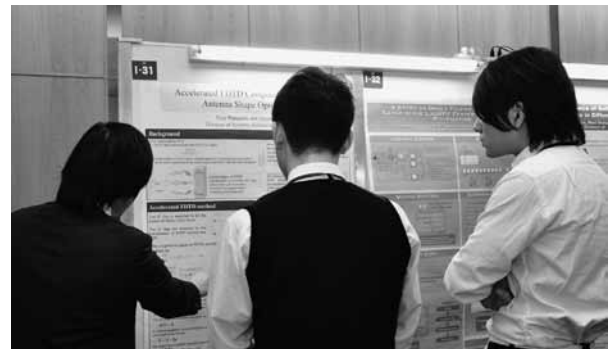
異分野共同研究は本プログラムによる拠点

形成の大きな柱であり、シンポジウムではROV(Remotely Operated Vehicle:有索無人潜水機)プロジェクトに関わる特別セッションに加え、拠点メンバーによる進行中のプロジェクトについての発表が行われました。さらに、本研究科の大学院生とPDによる91件のポスターセッションも行われ、活発な討論が交わされました。

本シンポジウムは、企業及び学外からの参加者も含め、延べ250名以上の参加者を迎えて活気あふれる国際シンポジウムとなりました。関連して、シンポジウム後に本プログラム主催のGCOEポストワークショップが、1月20日(木)、21日(金)の両日、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーにおいて開催されました。



基調講演の様子



ポスターセッションで説明する学生

(情報科学研究科)

## 「エコプロダクツ 2010」に出展

環境科学院と公共政策大学院で展開している「持続可能な低炭素社会づくり」プロジェクトでは、多様化する環境問題の解決に向けて分野横断的な知見や手法を以って対処できる専門家・実務者の養成を目的とする全学的な共通教育プログラムを提供しています。

主な活動として、北海道における再生可能エネルギーの普及促進、地域社会の温室効果ガス排出削減に向けた研究提言、また、札幌キャンパスの環境負荷低減を目指すサステナブルキャンパス活動などが挙げられます。

そのような私たちのプロジェクトの教育・研究成果を学外へ発信する機会として、昨年度に引き続き、東京ビックサイトで催される我が国最大級の環境展示会「エコプロダクツ 2010」に本学としてブース出展しました。今年度も12月9日（木）～11日（土）の3日間に計18万3,000人の来場者が会場を訪れ、様々な出展者が構える745ものブースでエコプロダクツや環境活動に触れ、それぞれのスタイルでエコライフの実現を考える場となりました。

今回も環境科学院と公共政策大学院、そして北大生協学生組織委員会から計20名の学生が「キタエコ～北大生がつくる未来～」というコ

ンセプトの下、2箇所にて設けられた展示ブースの案内や外国語・キッズ担当などの業務を行いました。

ポスターやモザイクアート、プレゼンテーションやスタンプラリーなどの手法を用い、環境科学院ECO事業や、サステナビリティ・ウィーク2010開催期間に実施されたベロタクシープロジェクト、北大生協の環境配慮活動など、現在本学で行われている環境研究・学生生活動の一端を紹介できたことは、普段行っている研究活動の成果を一般社会へ発信し、直にコメントを得ることのできる、とてもよい機会となりました。また、今回は企画立案から主催者との連絡、準備にいたる作業を学生主体で行いましたが、このような経験を積むことは、環境問題を解決する実務者を目指す上で、またとない実践の場となったと思います。

次年度開催予定の「エコプロダクツ2011」への出展は未定ですが、本学の環境問題に対する取り組みを広く社会に発信できる場として捉え、学内外の連携をより緊密にし、十分な研究成果を得た上でまたブース出展をできればと考えています。



出展メンバー集合写真

(環境科学院・地球環境科学研究院)

## 東アジアメディア研究センターが、東京で 国際シンポジウム「中国の影響力拡大と日本 —政治体制改革とメディアの越境—」を開催

メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター（センター長：渡邊浩平教授）は、北海道大学グローバルCOE「境界研究の拠点形成」、および財団法人経済広報センターの共催を得て、1月31日（月）、東京・大手町の経団連会館で、国際シンポジウム「中国の影響力拡大と日本—政治体制改革とメディアの越境—」を開催しました。

中国が経済規模において世界二位となった2010年、中国のメディアが対外情報発信の強化に向けて大きな一歩を踏み出しました。2010年初め、国営通信社・新華社は中国新華電视网（CNC World News）を開設しました。新華社はCNCをCNNやアルジャジーラのような国際的に影響力のあるニュースチャンネルに育てるとしています。09年末には、中央電視台が中心となり開設された多言語ウェブテレビ・中国ネットワーク電台もスタートしています。中国メディアの「走出去（対外進出）」は国際社会に、また日本に、何をもたらすのでしょうか。ビジネスの面において中国メディアは、海外メディアや企業との間でさまざまな連携を模索しています。

近年、中国のメディア研究で先進的な取り組みを行っている香港大学ジャーナリズムメディア研究センターの所長 陳婉瑩教授と同センターのプロジェクト・マネージャー 錢鋼氏を

お招きし、「中国メディアの対外進出」をテーマに、シンポジウムを開催しました。企業・団体の中国担当・広報担当者、メディア関係者、研究者など約200名が参加しました。

第一部では、長年、中国で新聞記者として活躍され、ルポルタージュ作家としても著名な錢鋼氏より、中国メディアと政治体制改革についてご報告をいただき、次に、陳教授より、中国メディアの対外進出、越境をテーマに講演をいただきました。

第二部のディスカッションでは、日本放送協会解説主幹の加藤青延氏、本学からメディア・コミュニケーション研究院の高井潔司教授、渡邊浩平教授もパネリストに参加し、中国社会の現状とメディアの動きについて、中国の影響力拡大と日本という視点から活発な議論が行われました。

北アフリカ諸国で改革を求める大規模デモとインターネットメディアの影響力が話題になっていた時期での開催であり、参加者からも非常に高い関心が集まりました。会場からも積極的な発言があり、大盛況のうちに終わることができました。

また、1月29日（土）には、陳教授と錢鋼氏の両名を本学に招き、情報教育館で同様のシンポジウムを行い、国際広報メディア・観光学院の学生とも交流が図られました。



満員の会場



講演する香港大学 陳教授

（メディア・コミュニケーション研究院）

## 工学系教育研究センター 「海外インターンシップ体験報告会」を開催

工学系教育研究センター（CEED）における、創造的・実践的人材育成を支援する教育プログラムのうち、海外インターンシップ派遣教育プログラムは、基礎学術と産業社会の関係、広範囲な技術分野への対応性、国際的な場での活動能力、リーダーシップやコミュニケーション能力の重要性を学ばせる中核となる教育事業に位置付けています。

このため、本センターでは海外インターンシップ派遣教育プログラムに参加した学生には帰国後に体験発表をさせることにしており、平成22年度は、10月6日（水）、12月10日（金）並びに12月14日（火）の3回に亘り「海外インターンシップ体験報告会」を開催しました。平成23年度の海外インターンシップ派遣教育プログラムにチャレンジする学部学生も多数参加し盛況でした。平成22年度の海外インターンシップ研修生の派遣先（平成23年1月末現在）は、44名中12名が企業、29名が大学、3名がその他の公的研究機関であり、平均研修期間は2ヵ月（平成22年度実績）でした。各派遣学生の研究テーマは、実験、解析・計算、ソフト作成、調査、試作・評価など多岐にわたっています。

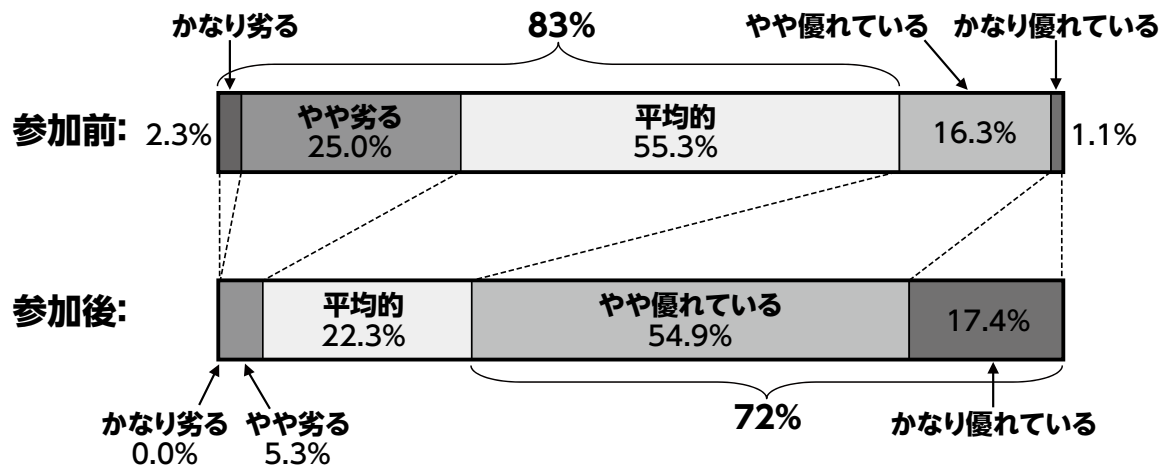


海外インターンシップ体験報告会の様子

一方、海外でのプロジェクト型インターンシップを体験した学生の派遣前後における異文化理解、問題把握発見能力、チャレンジ精神などの12項目の資質に関して、派遣前では83%の学生が「平均的」以下であったのが、派遣後には72%の学生が「やや優れている」や「かなり優れている」などへの著しい資質向上が認められています（図-1参照）。

平成17年に設立されたCEEDは、その第1期5ヵ年計画が終了しましたが、この海外インターンシップ派遣の教育効果が極めて高いことを踏まえ、平成22年度より「国際インターンシップの拠点を造り、インターンシップ教育の恒常化による人材の国際流動性を向上させる」第2期6ヵ年の教育事業に着手しました。第2期の平成27年度における達成目標は、毎年100名以上を海外へ派遣し、毎年100名以上を海外から受入れることとしています。その取組においてCEEDの海外インターンシップ交流が大学にもたらす利点等を検討したので以下に紹介します。





12の自己評価項目

- ①学問的知識を実際問題へ活用する能力
- ②決断力, 判断力, 優先度決定力
- ③新しい経験へのチャレンジ精神
- ④解らないことを質問し, 教えを請う態度
- ⑤問題を理解・把握し, 又は問題を見出す力
- ⑥他の人と連携協力して計画・実行する態度
- ⑦創造性, 新アイデアを生み出す力
- ⑧専門分野での技量・技能
- ⑨忍耐力, 向上心
- ⑩英語実践力
- ⑪異文化理解, 外国での行動・生活感覚
- ⑫積極性, リーダーシップ

図-1 海外インターンシップ派遣の教育効果 (2008年度と2009年度の派遣学生22名)

検討に先立ち, 第1期と第2期初年度の6年間の海外インターンシップ交流実績を派遣と受入れの双方についてまとめた結果を図-2に示します。その結果, 派遣及び受入に関して順調に拡大できる見通しを得ています。

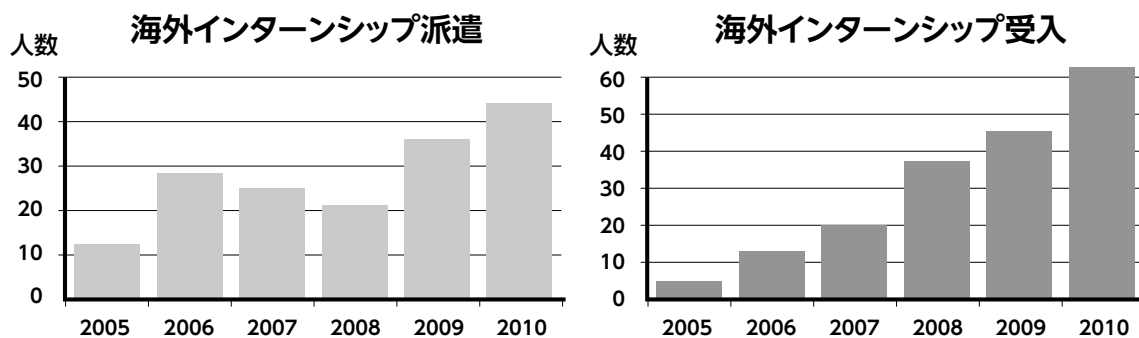


図-2 海外インターンシップ派遣と受入人数の経緯 (平成17年~平成22年)

またそれらの内容については, 平成17年4月のCEED発足以来, 海外へ派遣した学生総数は6年間で30カ国169名, 受入れ学生数は32カ国185名に達しており, 世界の各地域との相互交流状況を図-3に示します。その結果, 派遣と受入の総数は概ねバランスしているものの, 地域によってアンバランスがみられます。

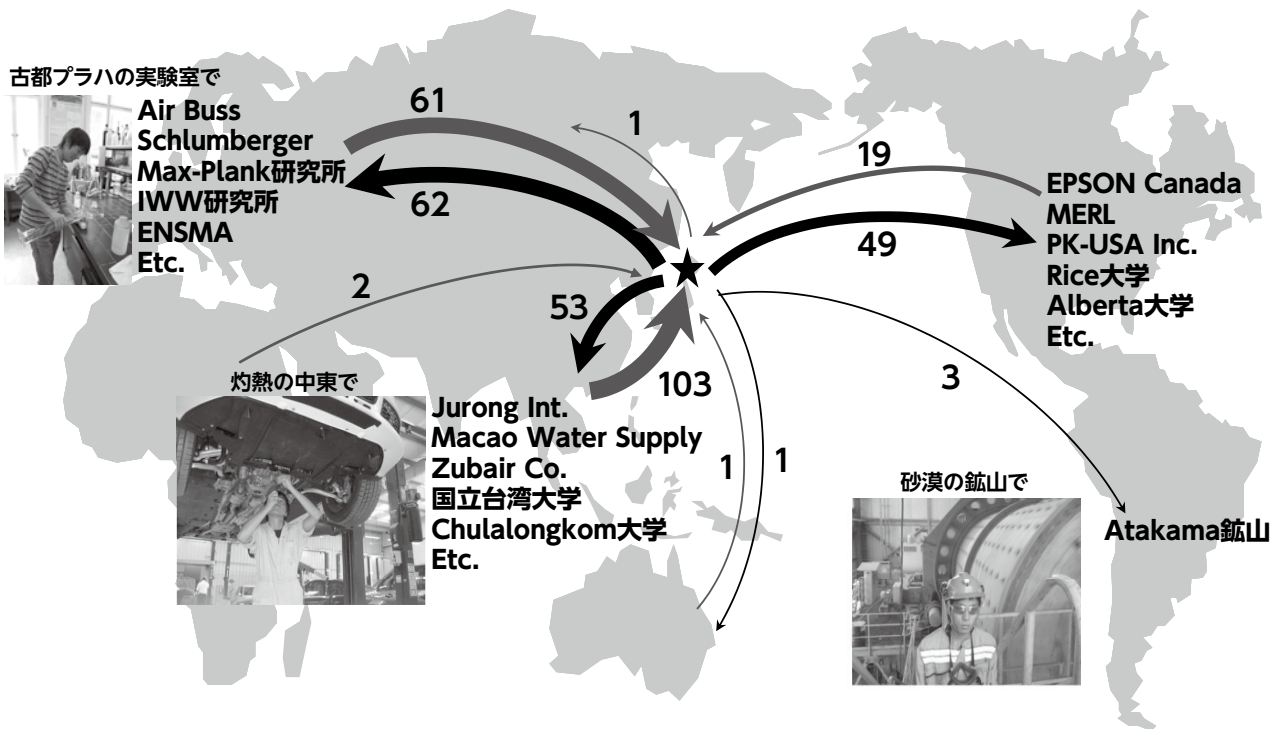


図-3 海外インターンシップ派遣及び受入実績（平成17年度～平成22年度）

このため、第1期の5カ年と最近の2カ年について世界の派遣先を地域別にまとめた結果を図-4に示します。図-4の過去5年間の派遣実績では75%が欧米志向でありました。そのため、21世紀の産業社会におけるアジア地域の重要性を学生に認識させた結果、最近の2年間では訪米とその他の地域がそれぞれ50%となってきました。

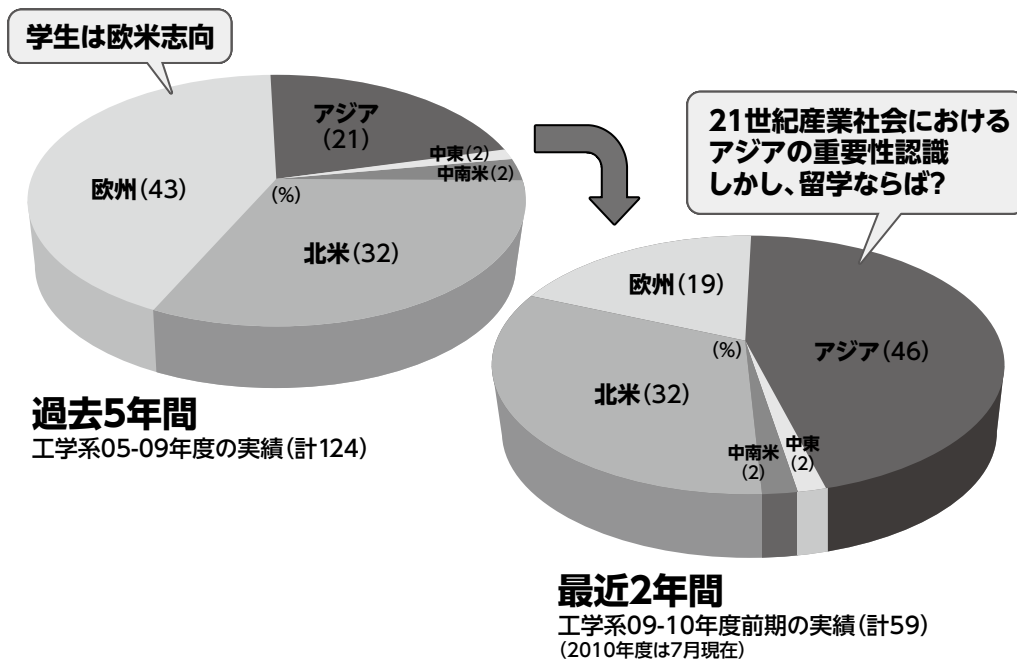


図-4 工学系の海外インターンシップ派遣先の推移

同様に海外からのインターンシップ受入に関する地域別の割合をまとめた結果を、平成20年度の工学系部局が受入れた留学生の地域別データと共に図-5に示します。その結果、留学生の派遣元地域は80%以上がアジア圏（その大部分が中国）であるが、インターンシップ研修生の派遣元地域は幅広い結果となっております。この主な要因は、「留学までは考えない日本の科学技術や文化への憧憬」に加えて「姉妹校に限らず応募が可能」であることと思われま

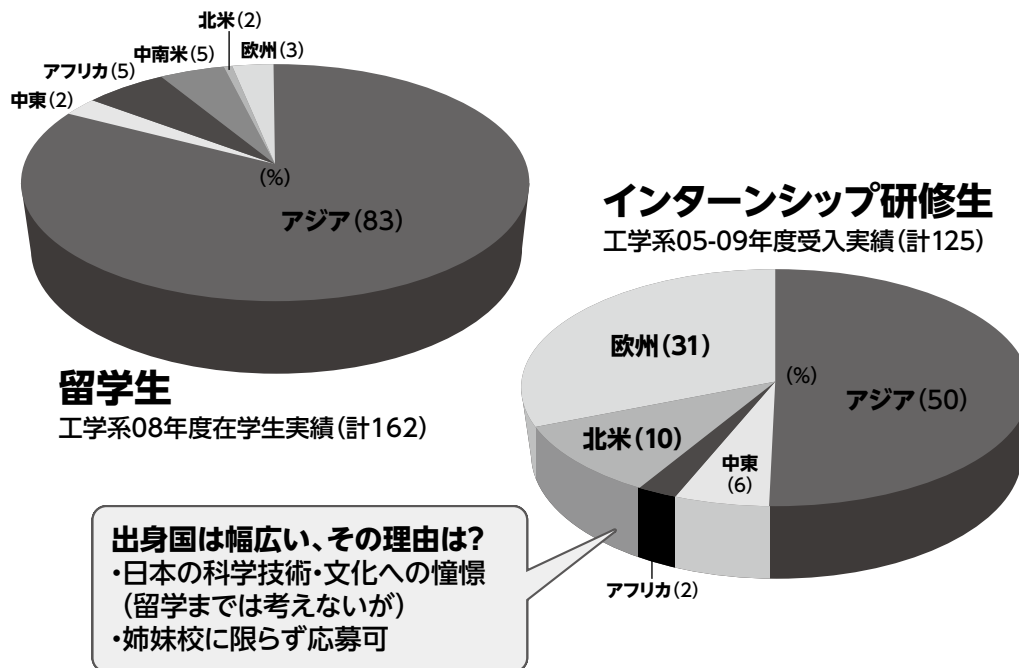


図-5 留学生とインターンシップ研修生の派遣元地域の比較

以上により、工学系部局では「インターンシップから博士課程留学への展開」、「インターンシップ交流から研究交流への展開と大学間交流協定締結への展開」、「受入側北大生に対する教育効果(勉強意欲・国際意識向上)」などの北大としての利点を念頭に国際拠点形成を進めることにしています。

(工学院・工学研究院・工学部)

## 真冬の森の宝を見つけたよ！—雨龍研究林で「森のたんけん隊2011冬」を開催

北方生物圏フィールド科学センターでは、小学生を対象とした「森のたんけん隊2011冬」を1月13日（木）～14日（金）に雨龍研究林（雨竜郡幌加内町母子里）で開催しました。

〈当センター森林圏ステーションHPにも掲載 <http://forest.fsc.hokudai.ac.jp/~exfor/fr/>〉

森のたんけん隊は、名寄市北国博物館・幌加内町教育委員会と共同で開催している1泊2日の宿泊体験型野外教育プログラムで、冬休み中の子供たちに研究林のフィールドや施設を開放し、楽しく遊びながら自然の営みや森と人間とのかかわりを学ぶことによって、健やかで個性豊かな人格形成と交流を促進するための地域連携社会教育事業です。

今年の森のたんけん隊には、地元の名寄市と幌加内町のほか、士別市、下川町、音威子府村などから総勢33名の元気な小学生が集まり、本学の大学院生や森のたんけん隊OBの中学生たちがボランティアとして運営をサポートしてくれました。

初日は厳しい寒さにも負けず、初めてカンジキをはいたとは思えないほど元気いっぱい雪の上を駆け回り、森の中に取り付けられたクイズを解きながら樹木の名前を覚えたり、方位磁石の使い方や雪の温度の計測、さらには木の肌に触れながらその太さや高さを測りました。休憩の後は、大きな焚き火で暖をとりながら、イグルーとスノーランタン作りに挑みました。イグルー作りでは、雪のブロックを運ぶ係、のこぎりでブロックの形を整える係、それを積み上げる係など、作業を分担し、協力して作りました。また思い思いの形のスノーランタン作りでは、出来上がったランタンにキャンドルを灯して幻想的な光の世界を楽しみました。夕食後はペットボトルを使ったアイスクリーム作りに挑戦しました。チョコレート、抹茶、ジャムなど12種類のメニューの中から何を選ぶかあれこれ迷いましたが、お風呂上りに食べたアイスはとてもおいしくて、思わず笑顔がこぼれました。



カンジキをはいて森の中へ。いろいろなクイズに答えよう。



初めて見る道具を使って、森の樹木の身体測定。



友達と協力しながら、雪のブロックでイグルー作りにチャレンジ。



塩を混ぜて雪温の変化を観察。おいしいアイス作りの秘訣を学ぶ。



二日目は雪上車に乗って森の奥地へ移動し、前日に学んださまざまな森の情報を思い出しながら、方位磁石や巻尺などの七つ道具を使い、巻物の指示を読み解きながら雪の中に埋められた宝箱を探しました。深い雪の中から無事に宝箱を掘り当てた瞬間には、森の中に歓声がこだましました。お昼は雪原でバーベキューを堪能した後、スノーモービルに乗って真っ白な雪原を駆け巡りました。最後に、「森のたんけん博士」の認定状をもらって、二日間の真冬の体験を締めくくりました。

子供たちは体と心で自然や友達との対話を楽しみ、ちょっぴり遅しくなって家に帰りました。「森の中で動物の足跡を見つけて嬉しかった」、「新しい友達ができた」、「おいしいアイスクリームが作れた」「スノーモービルにいっぱい乗れた」、「また来年も来たい」、などの感想が寄せられ、年末から準備作業に携わった職員の苦労も吹き飛びました。森のたんけん隊での経験を糧として、自然観察の面白さを学び、友達との交流が今後も広がっていくことを願いながら、今年の森のたんけん隊は終了しました。



深い雪の中で、巻物と七つ道具を頼りに森の宝さがし。

(北方生物圏フィールド科学センター)

## 農学院において「留学生新年会」を開催

農学院では、留学生主催の第25回留学生新年会を、1月7日（金）に農学部の大講堂で開催しました。今年は6ヶ国（韓国、中国、インドネシア、バングラデシュ、タイおよびミャンマー）の料理が総勢80名により用意され、日本人学生125名を含む240名以上の参加者に振舞わ

れました。

3ヶ国のカレー、2種類の餃子、春雨スープなどの料理も好評で1時間ほどであらかた食べ尽くされました。その後4ヶ国の留学生による歌、楽器演奏さらには踊り等の多彩な芸が会を盛り上げました。



留学生代表の挨拶



アングルの演奏と歌



ミャンマーの歌と踊り



ヒップホップダンス

（農学院・農学研究院・農学部）

## 教育GPワークショップ「博物館で個性が活かせる授業を創ろう！」第4回（題材：化石）開催

総合博物館では、1月22日（土）に1階「知の交流」コーナーにおいて、高等教育推進機構の池田文人准教授を講師に迎え「博物館で個性が活かせる授業を創ろう！」と題し、フィンランドの教育法を実際に体験し学ぶためのワークショップを開催しました。第4回目となる今回は、化石のスケッチからマインドマップを作り、そこから物語を創作する授業を体験しました。今回は講師として新たに大学院生2名が加わり、市民、学生、教員が一体となってフィンランド式の授業を体験・学習しました。

初めに、化石のスケッチをする際には、物の形を丸や三角、四角などの幾何学模様当てはめて捉えることで描きやすくなるという説明を受けてからスケッチに取り組みました。フィンランドでは、町や森に出て、様々な物を幾何学模様当てはめ、場所ごとに比較する授業があるそうです。

スケッチした絵に色を塗り終わると、次はA4の紙を4等分し、それぞれの化石が進化した姿を4パターン、想像して描くことになりました。その後、参加者は各グループ内でそれぞれ自己紹介を交えながら、自分が考えた進化後

の生物を説明し、そこから各グループ1枚ずつ進化後の生物の絵を選び、選ばれた生物の姿を描くことになりました。次に参加者は、それぞれが描いた進化後の生物の中から、さらに1枚の絵を選んで模造紙の中心に貼り、「周りの生物」「一生」「生息場所」の3つの枝葉と、自由なテーマで作れる枝葉1つを出発点に、それぞれマインドマップを作成しました。

最後に、参加者は作成したマインドマップの内容から、起承転結のある物語を創作しました。「起」の部分では進化する前の姿（アンモナイトや三葉虫など）が示され、「承」で事件（気象の変化など）が起こり、「転」で、各グループに与えられた生物が存続するための選択（生息場所や生態など）を行い、「結」で進化後の姿が示されるというものです。物語ができると、各グループから1名が、ホワイトボードに貼ったマインドマップの前に立ち、発表を行いました。

今回もまた、幅広い年齢層の参加者が集まり盛況でした。最終回ということで、参加者からは、来年度の開催を希望する声が多数寄せられました。



化石をスケッチする参加者



物語を発表する参加者

（総合博物館）

## 第15回北海道大学教育GPセミナー 「教育の改革と将来像」開催

総合博物館では、1月29日（土）に1階「知の交流」コーナーにおいて、脇田稔理事・副学長・教育改革室室長を講師に迎え、「教育の改革と将来像」と題し、北大が行ってきた教育改革と、今後の展望についてご講演いただきました。

まず、教養部の廃止やコアカリキュラムの導入など、1995年以降、本学が積極的に取り組んできた教育改革について、魅力的な科目を取り上げながら紹介していただきました。共通科目、総合科目、基礎科目、主題別科目、外国語科目、一般教育演習といった充実した教養科目の中でも、特に一般教育演習は、臨海実験場や附属牧場、研究林、練習船などを利用した合宿形式の演習を行っている点で、大変ユニークな科目だということでした。

また、単位の実質化を目的として導入された5段階評価、GPA制度、自由設計科目制度についても紹介していただきました。これらの教育改革により、1クラスの平均履修者数が減少

した一方、自習時間とGPAの数値が増加したというデータが出ており、量より質の教育への変化が見られるということでした。

最後に、学部一貫教育が持つ欠点を補うものとしての総合入試の意義や、さらなる改革に向けて、世界水準の人材育成システムを確立し、世界に開かれた大学を実現するという、本学の教育の将来像・長期目標など、現在の改革から今後の展望までを、分かりやすく、また詳細に紹介していただきました。

参加者はメモをとりながら熱心に聞き入り、質疑応答時には、大学教育が国際化した場合、高校の教育とスムーズに接続させるにはどのようにするべきかといった具体的な質問から、教育改革に学生の声を取り入れてはどうかという北大生からの提案も出るなど、大変盛況でした。もっと長い時間講演してほしかったという声も聞かれ、教育に対する関心の高さが感じられたセミナーとなりました。



講演する脇田理事・副学長



セミナーの様子

(総合博物館)



## ポーリン・レーン書簡を大学文書館で受贈

大学文書館では1月14日(金)に、ポーリン・レーン(Pauline Roland Sistare Lane, 1892-1966)書簡6点を、沼田勇美氏からご寄贈いただきました。

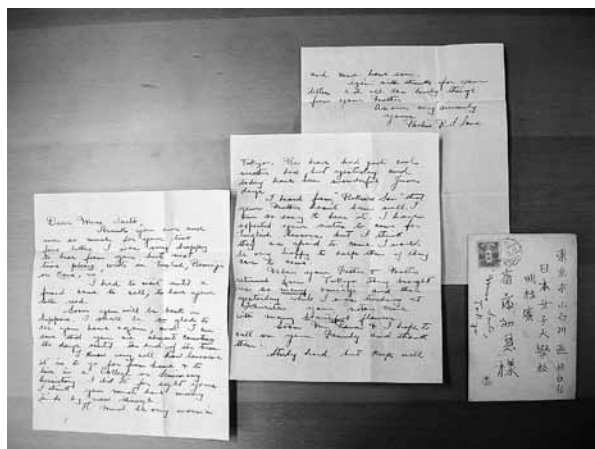
ポーリン・レーンは、1892(明治25)年12月7日京都で生まれ、父のジョージ・M・ローランド宣教師が札幌組合教会へ赴任するにあたり、1896(明治29)年10月に来札しました。1922(大正11)年、北海道帝国大学予科の外国人教師(英語担当)であったハロルド・M・レーンと結婚後は、北大構内の外国人官舎(北11条西5丁目)で1942年まで暮らしていました。ポーリン・レーン自身も、1928~29, 37~42年にかけて、予科で英語を教えていたこともあり、北大生たちから大変慕われていました。

この度、受贈した書簡は、1920年代後半~1930年代頃、ポーリン・レーンが、齋藤丸竹味噌醤油醸造所(北1条西14丁目)を営む齋藤家の家族に宛てた封書です。齋藤家の遠戚にあたる沼田勇美氏が齋藤家から譲り受けたものです。齋藤甚之助・与祢夫妻宛てが1通、夫妻の長女である齋藤初恵宛てが5通です。書簡からは、ポーリン・レーンが、長女(北海道庁立札幌高等女学校生徒)の英会話の家庭教師でもあったことから、齋藤家とのあたたかい交流がうかがえます。

今後、受贈資料については、沼田勇美氏から提供を受けた書簡の解説文や写真画像と共に、大学文書館において大切に保管し、幅広く活用していきます。



ポーリン・レーンと齋藤家(1932~33年頃)  
(中央がポーリン・レーン、右端が齋藤初恵)



齋藤初恵宛てポーリン・レーン書簡(1927年)  
(日本女子大学校に進学した初恵に宛てたもの)

(大学文書館)

## 大学文書館第1回企画展示「台湾に渡った北大卒業生たち」を開催

大学文書館では1月20日（木）から、附属図書館北方資料室の前室を会場として、第1回企画展示「台湾に渡った北大卒業生たち」を開始しました。

戦前の北大は、日本の台湾植民地統治に深く関わりました。新渡戸稲造が、日本の台湾植民地統治・経営に大きな役割を果たしたことはよく知られています。しかし、台湾に渡った北大卒業生の多くは、台湾総督府の農政実務者、農事試験場技師、台北帝国大学等の教員として植民地統治を下支えする役回りを担いました。彼らのもたらした技術や学術は、第一義的に植民地統治を目的としていました。その一方で、技術・学術が有する普遍的価値ゆえに、台湾の人々はその成果を取り込んで台湾の社会・産業・文化の形成に役立てたという側面も見られます。この企画展示では、こうした北大卒業生たちの担った多面的な歴史的役割を考えてみたいと思います。

第I期の今回は、「統治・経営と農業経済学」をテーマとし、初期渡台者と農業経済学を学んだ卒業生を取り上げます。彼らは台湾統治・経営にどのような形で関わったのでしょうか。取り上げる人物は、柳本通義（札幌農学校第1期生）、新渡戸稲造（第2期生）、横山壮次郎、藤根吉春、長崎常（以上第8期生）、十川嘉太郎（工学科第2期生）、東郷實（第22期生）、色部米作（第23期生）です。展示資料は、札幌農学校簿書、高岡熊雄関係資料（以上、大学文書館蔵）、台湾総督府文書（国史館台湾文献館蔵、複製）などです。

第I期の展示期間は、3月18日（金）までです。引き続き、第II期、第III期を順次、開催します。

本企画展示を通じ、多くの皆さまに北海道大学の歴史、そして台湾に対して、改めて関心を向けていただければと思います。



台湾恒春のガジュマルの前にて（1915年）



展示風景

（大学文書館）

## お知らせ

## 過半数代表候補者の決定

札幌キャンパス事業場（病院を除く。）における過半数代表候補者は、以下のとおり決定いたしました。

職種・系区分		過半数代表候補者		
教 員	文系	(教育学研究院)	姉崎 洋一	
	理系	理学研究院	渡邊 剛	
		工学研究院・ 情報科学研究科	(情報科学研究科)	工藤 信樹
		上記以外の理系	(農学研究院)	東山 寛
	医系	(薬学研究院)	山本 融	
	附置研究所・全国 共同利用施設系	(電子科学研究所)	西山 宏昭	
事 務 系 職 員		(財務部)	徳田 歳広	
		(附属図書館)	福盛田 勉	
技 術 系 職 員		(北方生物圏フィールド科学センター)	持田 大	
特 任 教 員 ・ 契 約 ・ 短 時 間 勤 務 ・ 嘱 託 職 員		(工学研究院)	石川 貞夫	
		(法学研究科)	小野寺 美帆	

(総務部職員課)

## 国立女性教育会館所蔵図書の貸出サービス実施中

附属図書館北図書館では、1月17日（月）から1年間、国立女性教育会館・女性教育情報センターのパッケージ貸出サービスを利用した図書の貸出サービスを始めました。

国立女性教育会館とは、男女共同参画社会の形成を目指した女性教育に関するナショナルセンターです。女性教育情報センターは、男女共同参画や女性・家庭・家族に関する専門図書館で、多くの方に活用してもらうため、テーマごとに選定したパッケージを大学や女性関連施設、公共図書館等に貸出するサービスを行っています。今回、北大でもこのサービスを利用することになりました。

4ヶ月ごとに図書の内容は入れ替わります。1月から4月までは、「生き方」「大学」「コミュニケーション」「セクシュアリティ」「男女共同参画」というテーマによる200冊です。

本学の学生・大学院生や教職員など図書館利用証をお持ちの方はどなたでも借りることができます。どうぞご利用ください。

本学の学生・大学院生や教職員など図書館利用証をお持ちの方はどなたでも借りることができます。どうぞご利用ください。

実施期間（第1回）：平成23年1月17日（月）～平成23年4月28日（木）

配架場所：北図書館2階カウンター前

貸出期間：15日間

貸出冊数：2冊（北図書館の貸出冊数とは別枠になります）

※図書入替のため、一時的に閲覧のみの利用となる場合があります。詳細は図書館HPや館内の掲示でお知らせします。



展示風景

（附属図書館北図書館）



# 研 修

研 修 名 (主催部局名)	開催期間	開催場所	研 修 目 的
平成22年度北海道地区 国立大学法人等事務情報化 講習会 (ACCESS中級) (企画部情報企画課)	平成23年 1 月18日 ～平成23年 1 月20日	北海道大学 情報基盤センター北館	北海道地区国立大学法人等の事務職員に対して、業務システムのデータを利用し、Accessを業務の道具として有効に活用するための(Access 中級程度の)知識並びに基本的な情報セキュリティ等の基礎知識を習得することを目的とする。
平成22年度北海道地区 国立大学法人等事務情報化 講習会 (ACCESS初級) (企画部情報企画課)	平成23年 1 月24日 ～平成23年 1 月25日	北海道大学 情報基盤センター南館	北海道地区国立大学法人等の事務職員に対して、業務システムのデータを、Accessを利用して活用するための基礎知識並びに基本的な情報セキュリティ等の基礎知識を習得することを目的とする。



講習会の様子

## 表 敬 訪 問

〈国内〉

月 日	来 訪 者
23. 1 .13	文部科学事務次官 清水 潔 氏



文部科学事務次官 清水 潔 氏  
(右から2人目)

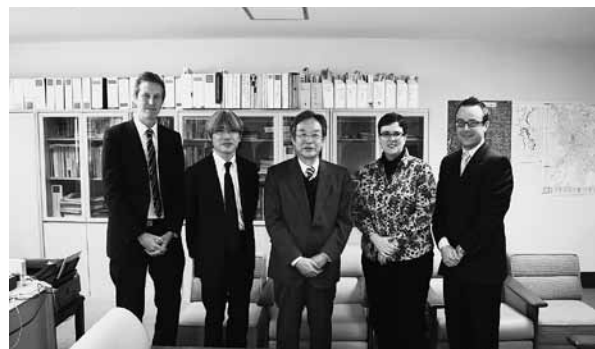
(総務部広報課)

〈海外〉

月 日	来 訪 者	目 的
23. 1 .11	ゲオルグ・アグリコラ応用科学大学 (ドイツ) Jurgen Kretschmann 学長	両大学の交流に関する懇談
23. 1 .11	オクラホマ大学 (アメリカ) Elyssa Faison 教授	両大学の交流に関する懇談
23. 1 .13	タンペレ応用科学大学 (フィンランド) Marja Sutela 副学長	両大学の交流に関する懇談
23. 1 .14	釜慶大学校 (韓国) Yeon-Ho Chung 国際交流院長	両大学の交流に関する懇談
23. 1 .19	フランス ENSMA (国立機械航空高等大学) 一行	両大学の交流に関する懇談
23. 1 .24	台湾国立交通大学理学院 一行	電子科学研究所との部局間 交流協定調印式
23. 1 .25	ソウル女子大学校 (韓国) 李 光子 総長 一行	両大学の交流に関する懇談
23. 1 .25	中国海洋大学海洋環境学院 付 剛 院長 一行	両大学の交流に関する懇談
23. 1 .27	駐日バングラデシュ人民共和国特命全権大使 A.K.M. Majibur Rahman Bhuiyan 氏	両国の交流に関する懇談
23. 1 .27	忠北大学校工科大学 (韓国) 一行	両大学の交流に関する懇談



ゲオルグ・アグリコラ応用科学大学  
Jurgen Kretschmann 学長 (左端)

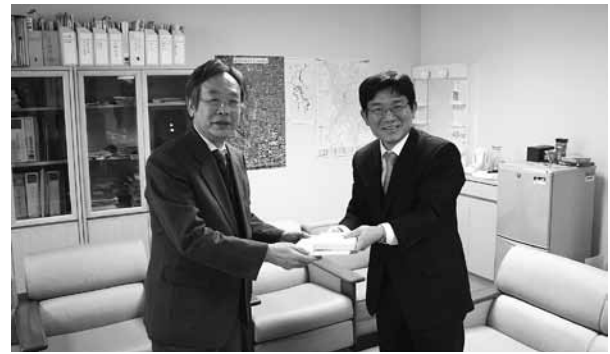


オクラホマ大学 Elyssa Faison 教授  
(右から2人目)

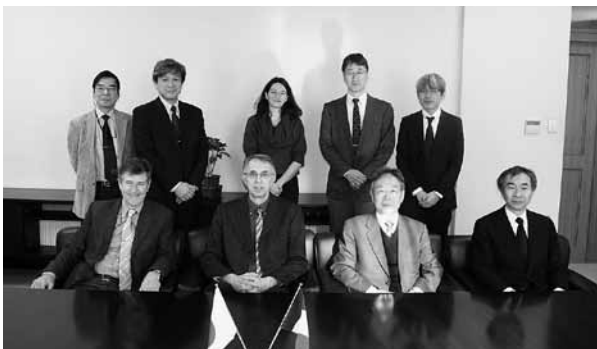
表 敬 訪 問



タンペレ応用科学大学 Marja Sutela 副学長  
(前列右から2人目), Riitta Makela 工学部長  
(前列左から2人目)



釜慶大学校 Yeon-Ho Chung 国際交流院長



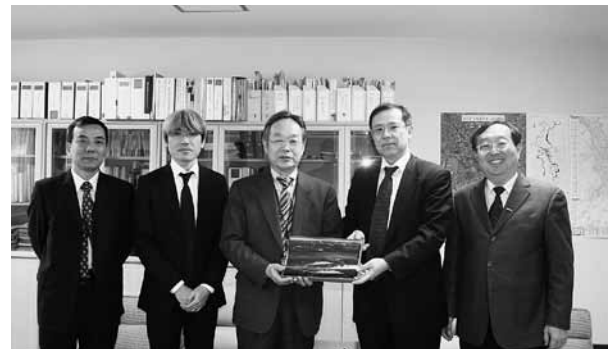
フランスENSMA (国立機械航空高等大学) 一行



台湾国立交通大学理学院 一行



ソウル女子大学校 李光子 総長 (中央) 一行



中国海洋大学海洋環境学院 付剛 院長 (右端) 一行



駐日バングラデシュ人民共和国特命全権大使  
A.K.M. Majibur Rahman Bhuiyan 氏



忠北大学校工科大学 一行

(国際本部国際連携課)



## 同窓会との交流

### － 恵迪寮同窓会「新年寮歌歌始めの会」 －

1月29日（土）、昭和18年入寮のOBから現役寮生まで約90名の参加者が集い、恵迪寮同窓会「新年寮歌歌始めの会」が札幌市中央区にある『氷雪の門』で開催され、本学からは逸見勝亮理事・副学長が出席しました。

最初に、恵迪寮同窓会北海道支部総会が行われ、引き続き「新年寮歌歌始めの会」となり、同会横山清会長から年頭のご挨拶があり、次いで、逸見理事・副学長が来賓を代表して挨拶を行いました。

次に、“恵迪寮魂”の拠り所「都ぞ弥生」を全員で斉唱し、横山会長、逸見理事・副学長他による鏡開きが行われ、来年に迎える「都ぞ弥生」百年記念に向けての活動方針の説明があった後、同会北海道支部名誉支部長の安井勉氏（S18入寮）による乾杯の発声がありました。

暫しの懇談をはさんで寮歌高唱が始まり、入寮年次別に登壇して、現役寮生と共に数々の寮歌が歌い継がれ、合間には、ゲストとして招かれた北大硬式野球部の安達三郎監督の大学選手

権ベスト8への道程や神宮球場に響き渡った「都ぞ弥生」に感動したことを交えた挨拶や、「都ぞ弥生」ドイツ語訳歌者である東北工業大学丹治道彦准教授から北大寮歌への熱い想いが語られ、また、プログラムには無かったドイツ語訳と中国語訳の「都ぞ弥生」の高唱もありました。

寮歌高唱の最後には、参加者全員が会場いっぱい大きな人の輪を作り、札幌農学校校歌「永遠の幸」を高唱し、次に同会が製作中の「都ぞ弥生」のCDに収録予定の「ストームの歌」を生録音するために全員で高唱しましたが、“コチャエ”の発声と共にステップを踏むシーンも見られました。

なお、約3時間半にも及んだ会では、会場のあちらこちらでお酒を酌み交わしながら談笑するOBと現役の交流風景が見られるなど、最後に次回の再会を誓い合い、盛会のうちに終了しました。



年頭の挨拶をする横山会長



鏡開きに参加する逸見理事・副学長



これぞ寮歌の一コマ



「ストームの歌」の輪

(総務部広報課)



## 諸会議の開催状況

### 役員会（平成23年1月11日）

- 議案・中期目標期間評価（教育研究評価）に係る評価報告書（案）の意見申立てについて  
 ・平成22年度中期目標達成強化経費第二次決定事業について
- 協議事項・教員の早期退職者制度について  
 ・平成23年度年度計画の主な事項について  
 ・探索医療教育研究センターの設置について  
 ・農学部の学科の名称変更について  
 ・農学研究院の部門の設置について  
 ・履修証明制度の導入について  
 ・授業料免除に係る判定方法等について  
 ・諸規則の制定及び一部改正について
- 報告事項・北海道大学プロフェッサー・ビジット2010について  
 ・平成21年度における国立大学法人及び大学共同利用機関法人の業務の実績に係る評価の結果についての意見について  
 ・札幌キャンパスにおける交通動線の改善等に関する基本方針について  
 ・教育研究支援本部付技術職員派遣先部局等の決定について  
 ・平成22年度総長室事業推進経費の追加配分について  
 ・平成23年度予算（予定額）について

### 教育研究評議会（平成23年1月18日）

- 議題・探索医療教育研究センターの設置について  
 ・農学部の学科の名称変更について  
 ・農学研究院の部門の設置について  
 ・授業料免除に係る判定方法等について  
 ・安全衛生本部の設置について  
 ・諸規則の制定及び一部改正について  
 ・教員の懲戒について
- 報告事項・北海道大学プロフェッサー・ビジット2010について  
 ・平成21年度における国立大学法人及び大学共同利用機関法人の業務の実績に係る評価の結果についての意見について  
 ・平成23年度予算（予定額）について  
 ・ICカードの券面デザインについて  
 ・寄附講座の設置及び更新について  
 ・大学間交流協定の新規締結について  
 ・学生の懲戒について

### 経営協議会（平成23年1月19日）

- 議題・教員の定年前退職制度について  
 ・平成23年度年度計画の主な事項について  
 ・規程の改正について
- 報告事項・次期総長候補者の選考結果について  
 ・「北大フロンティア基金」の寄附受入状況について  
 ・世界大学ランキングについて  
 ・北海道大学の研究活動について  
 ・「北海道大学創成研究機構9年間のあゆみ」について  
 ・平成22年度補正予算について  
 ・平成23年度予算（予定額）について  
 ・役員及び職員の給与について

### 役員会（平成23年1月24日）

- 議案・教員の定年前退職制度について  
 ・探索医療教育研究センターの設置について  
 ・農学部の学科の名称変更について  
 ・農学研究院の部門の設置について  
 ・授業料免除に係る判定方法等について  
 ・安全衛生本部の設置について  
 ・諸規則の制定及び一部改正について
- 報告事項・低温科学研究所附属旧紋別流水研究施設の一部譲渡について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

## 学 内 規 程

---

**国立大学法人北海道大学自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程**

(平成23年1月19日海大達第5号)

**国立大学法人北海道大学水産学部等の施設に係る自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程**

(平成23年1月19日海大達第6号)

平成22年12月27日限りで札幌地区の学生寮（霜星寮）の自家用電気工作物を廃止することに伴い、所要の改正を行ったものです。（平成22年12月28日適用）

---

**国立大学法人北海道大学創成研究機構共用機器管理センター分析・加工受託規程の一部を改正する規程**

(平成23年2月1日海大達第7号)

創成研究機構共用機器管理センターにおいて実施している分子構造分析について、分析項目及び分析料の変更を行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

**国立大学法人北海道大学大学連携研究設備ネットワーク設備利用規程の一部を改正する規程**

(平成23年2月1日海大達第8号)

「大学連携研究設備ネットワークによる設備相互利用と共同研究の促進事業実施規約」の規定による相互利用に供する設備の追加を行うこと及び委託に基づく測定に係る料金を定めることに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

---

# 人 事

## 平成23年1月16日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 電子科学研究所助教	NEWTON MARCUS CHRISTIAN	採用

## 平成23年1月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (辞職)	小 原 雅 人 馬 渕 亜希子	北海道大学病院助教 北海道大学病院助教
【技術職員】 (辞職)	内 田 千 草 松 崎 ちなみ	北海道大学病院看護部助産師 北海道大学病院看護部助産師

## 平成23年2月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 大学院農学研究院准教授 大学院工学研究院准教授 大学院工学研究院准教授 大学院工学研究院准教授 低温科学研究所准教授 アイヌ・先住民研究センター准教授	清 水 直 人 木 下 博 嗣 田 坂 裕 司 辻 雅 司 深 町 康 丹 菊 逸 治	筑波大学大学院生命環境科学研究科講師 大学院工学研究院助教 大学院工学研究院助教 大学院工学研究院助教 低温科学研究所助教 採用
【講師】 国際本部講師	正 木 幹 生	採用
【助教】 北海道大学病院助教 アイヌ・先住民研究センター助教	河 口 泰 之 落 合 研 一	採用 採用
【技術職員】 施設部施設整備課 水産学部附属練習船おしよろ丸司厨員	瀬 川 貢 滝 澤 勉	採用 採用

# 訃 報

## 名誉教授 佐藤 修 氏 (享年85歳)



名誉教授佐藤 修氏は平成23年1月7日、85歳で逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

同氏は大正14年6月11日愛知県に生まれ、昭和23年3月北海道大

学理学部物理学科を卒業され、同年6月北海道大学理学部副手、同24年3月理学部助手、同28年4月水産学部講師、同34年9月水産学部助教授、同49年4月水産学部教授、同60年4月水産学部長、大学院水産科学研究科長を経て、平成元年3月停年により退官され、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。退官後は、平成2年4月から同9年3月まで財団法人テクノポリス函館技術振興協会副理事長および北海道立工業技術センター長として勤務されました。

この間、同氏は長年にわたって水産工学分野、漁具工学分野の教育、研究に務められました。

漁具の流体力学的解析研究では、各種漁具の流体力諸特性について解析し、漁具工学の理論的体系化に大きく寄与されました。人工魚礁に関する研究では構造力学および流体力学的実験と理論的解析を行い、人工魚礁の物理学的諸特性を明らかにし、日本を始め世界における人工魚礁による漁場造成事業を積極的に推進するための主導的な役割を演じ、その基本的考え方は世界的に注目され高く評価されております。養殖施設に関する研究では、増養殖施設に作用する流体力の算定および施設の設計理論を確立して、日本の沿岸域における魚類養殖、ホタテガイ養殖、コンブ養殖などの基盤作りに多大な貢献をされ、日本および世界の漁業生産技術の発展、沿岸漁場生産の拡大、安定生産に多大なる貢献をなされました。

学会活動においては、日本水産学会シンポジウム企画委員、同支部長、評議員、理事を歴任して学会の発展と学術の進展に大いに寄与されました。また、農業土木学会水産土木研究会の設立時から運営委員としてこの会に参画し、現在の日本水産工学会設立のために大いに尽力

し、平成12年には同学会名誉会員に推挙され学術の発展に寄与されました。

地域社会活動としては、北海道科学技術審議会委員、青函インターブロック交流圏構想推進協議会委員、財団法人テクノポリス函館技術振興協議会理事、青函地域総合整備計画検討委員会委員長、北海道津軽海峡地域マリノベーション構想推進協議会委員長、海中空間利用研究会委員長などを勤められ、地域の文化、産業の振興に著しく貢献されました。また、水産庁の沿岸漁場整備開発事業中央検討委員、北海道釧路海域マリノベーション構想推進協議会委員長、水産庁特定地域沿岸漁場開発調査中央検討委員および同北海道地域委員長などを歴任され沿岸漁業の振興と発展に大いに寄与されました。さらに、財団法人テクノポリス函館技術振興会副理事長、北海道立工業技術センター長として地域の産業の振興に尽力されました。

また、北海道大学にあっては昭和50年4月から北海道大学評議員として、さらに同60年4月から平成元年3月まで北海道大学水産学部長および北海道大学大学院水産科学研究科長として大学運営の枢機に参加するとともに学部ならびに大学の運営、整備充実に尽力されました。また、国際的な学術交流に努力、世界各国から多数の留学生を積極的に受け入れ、国際的視野に立って学部・大学院教育を進められました。

漁場造成等の増養殖事業の振興に対する寄与および北海道大学水産学部における数多くの優秀な人材の育成、国際的な学術交流に尽力されるなど函館市の教育および文化の向上、人材の育成に大きく貢献したことから、平成元年11月には函館市文化賞（自然科学）を受賞されました。

平成15年4月には長年にわたる教育・研究等への功績により、勲二等瑞宝章を受章されました。

以上のように、同氏は長きにわたり北海道大学にあっては教育、研究に尽力され北海道大学の発展は勿論のこと、学界における学術の進展並びに地域の産業の振興、さらには日本の水産業の発展に多大の貢献をなされました。

ここに謹んで同氏の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)



教授 <sup>おがわ やすひろ</sup> 小川 泰寛 氏 (享年60歳)

教授 小川泰寛氏は平成23年1月16日午後4時18分、蘇生後低酸素脳症のため北大病院にて逝去されました。ここに同氏の生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

小川先生は昭和25年4月6日に北海道枝幸郡頓別村で生まれ、昭和48年3月、東京外国語大学英米語学科を卒業後、同年4月東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程に進まれ、同51年3月に同課程を修了、文学修士号を取得されました。昭和51年4月1日付けで北海道大学文学部講師(一般教育担当)として着任され、同56年11月には同助教授に昇任、同59年4月言語文化部に配置換となり、平成10年5月同教授に昇任され、平成19年4月大学院メディア・コミュニケーション研究院教授に配置換となりました。同16年よりは教育学研究科多元文化教育論講座(現:教育学院国際多元文化教育論講座)にも所属し、急逝される直前まで変わらず教育・研究に従事されておりました。

この間、小川先生は昭和53年8月から同54年6月まで、米国カリフォルニア大学LA校にて客員研究員、また、昭和63年8月から平成元年7月までは、米国ハーバード大学イェンチェン研究所にて客員研究員として研鑽を積み重ねました。

小川先生は北海道大学において35年の永きにわたり教養課程での英語教育に、また、平成12年からは大学院授業も担当され、多くの学生の教育に献身的に従事してこられました。研究面においても長年、一貫して英国演劇作家、シェイクスピアの研究に専心してこられ、着任以来ほぼ毎年発表された論考において、シェイクスピアの作品に見られる独特の修辞法や語りの意匠、あるいは、ドラマトウルギーといった面に注目し、テキスト論の視点を踏まえつつ、人文学はもとより社会科学分野からの視点をも加えた広い視野からのシェイクスピア研究に取り組んでこられました。二度の在米研究時に培った人脈と同氏の研究への高い評価として、Eerdmans社から1997年に出版された

The Grotesque in Art and Literature : Theological Reflections に掲載された英語論文や、Gale Research社から刊行されているシェイクスピア批評の年報 Shakespearean Criticism の創刊時(1989)より10人の編集顧問の一人に迎えられていることが挙げられるでしょう。また国内研究界でのご活躍は、岩波書店の『文学』(1986)や研究社の『英語青年』(1987)『シェイクスピア全作品論』(小津次郎先生記念論集, 1992)等に発表の論文にうかがわれます。

学内における校務について、全学教育科目責任者、留学生センター運営委員会委員、出題・採点委員会委員を歴任し、大学運営に多大な貢献をされました。また、部局内では、図書委員会委員長、教育計画委員会委員長をはじめ、人事委員会委員、総務委員会委員などの様々な委員を務め、重要な責務を終始一貫誠実に勤めてこられました。

本来ならこれから研究・教育の集大成に取り組まれることを楽しみにされていたはずの小川先生にとって、その機会が奪われたことがいかに心残りであったか、誠に惜しまれてなりません。ここにこれまでのご功績を偲び、心から先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(メディア・コミュニケーション研究院)

教授 <sup>こんどう さとし</sup> 近藤 哲 氏 (享年57歳)

医学研究科外科学講座腫瘍外科学分野教授 近藤 哲氏は平成23年1月17日午前0時14分、肺癌のため57歳で御逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は昭和53年3月に名古屋大学医学部を卒業され、肝胆膵外科治療における日本の最先端の教室として名高い名古屋大学第一外科で研鑽を積み、助教授の職を勤められた後、本学部外科学第二講座(旧称)助教授として招聘されたのは平成10年5月のことでありました。平成16年には第六代の教授に就任され、以後は肝胆膵領域を中心とした臨床と研究、医学教育、病院運営と、様々な分野でその辣腕を発揮され、まさに八面六臂の活躍をされていたさなかの突然の発病でありました。

先生は臨床・研究面において、日本の肝胆膵領域疾患治療に関して内科・外科を問わず多くの医療人の牽引者であったことは言うにおよばず、日本胆道学会では理事長として学会を率い、日本外科学会の理事としては次期のリーダーとしての呼び声も高かったこともあり、その訃報は全国の多くの関係者に大きな衝撃とともに伝えられました。

北海道大学病院では「地域大学循環型専門研修プログラム」、「臨床指導医養成プロジェクト」などの企画から申請までをこなし、見事に競争的資金を獲得するとともに、大学と地域医療の新たなシステム作りに奔走されました。その実績から、平成19年より北大病院教育・研修担当病院長補佐、平成22年4月からは北大病院副病院長に就任され、北海道大学病院にとっても無くてはならないリーダーのお一人でありました。

これからも長い年月をかけ、臨床と研究、あるいは医学教育を通じて、難治癌治療をはじめとする医療の進歩に多大なる貢献をされるものと皆が確信していた先生の、あまりにも早いご逝去に痛恨の念を禁じ得ません。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(医学研究科・医学部)

## 〈編集メモ〉

▼鈴木先生から寄贈いただいたノーベル賞のメダル（レプリカ）を総合博物館で展示しています。レプリカといってもノーベル財団が3つまでしか複製を認めていない貴重なもので、「本物と見分けがつかない」と鈴木先生も言われるほど精巧なものです。4月5日から開催予定のノーベル賞受賞記念特別展示に先立って、公開しているものです。関連して鈴木先生が実際に使用した分子模型、直筆色紙の展示、鈴木カップリングとその波及効果をパネルで紹介しています。

▼「日本で最初の運動会は札幌農学校の『力芸会（りきげいかい）』というのは本当か」という質問をいただきました。札幌農学校で開催されていた運動会を「遊戯会」と言っていたことは知っていましたが、「力芸会」というのは初めてです。大学文書館の井上先生にお聞きしたところ、最初の頃は「遊戯会」とともに「力芸会」とも言っていたそうです。

▼中央ローンで子どもたちが雪遊びをしていました。カラスの鳴き声に混じって子どもたちの明るい笑い声がキャンパスの冬空に響き渡りました。





2007.5.5 月形町

——— 北の息吹④ ザゼンソウ (*Symplocarpus foetidus* var. *latissima*) ———

ミズバショウと混生することが多いが、ミズバショウよりは乾いた場所を好み花期も少し早い。仏像の光背に似ると比喻される仏炎ほうはチョコレート色が基本ではあるが、きれいな赤みを帯びた個体から黒茶色まで変化の幅も多い。達磨大師に見立てられた中央の穂には多数の花があり、花が開ききると黄色い花粉で全体が汚れるし葉も巨大化するが、開花の早い段階では形の良い葉と花のバランスが絶妙である。私が長く生活した山形市には良く保護された見事な大群落がある。北海道にはミズバショウの大群落があちこちにあるが、ザゼンソウに関しては、山形の群集を凌駕するものをまだ見たことがない。

理事・副学長 岡田 尚武

**北大時報② February 2011 No.683**

平成23年 2月発行

北海道大学総務部広報課

〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-4870 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/